

特集を読んで(2010年1月号[特集=検証・三菱一號館再現])

shogo KISHIDA 岸田省吾

(建築家/東京大学教授)

tsuneto YAMAGISHI 山岸常人

(京都大学准教授)

10年後の再特集を期待する

昨今、どんな建物の設計でも、それが建つ場所、あるいはその建物が荷なう「歴史や文化」について考えることが前提ようになってきた。が、そうしたトピックをめぐる議論は、いまだ深まっているとは思えない。三菱一號館をめぐる特集は、そうした議論の展開や深化の手がかりを示してくれる優れた企画だと思った。

確かにこの建物は区域としての歴史の再生や失われた技術的知見の回復を可能にしたかもしれない。だが、やめたほうがいいと言われながら壊してしまって、今になって莫大な費用をかけ作り直しているのだから、意味不明と思う人も少なくないだろう。建主も今度こそ壊すことはない、それが企業のポリシーだ、みたいなことをおっしゃるが、そのポリシーがころころ変わったりする、そんな歴史もこの「再現」が物語っている。

でも、個人的には出来上がるのを楽しみにしていた。少し前までちょんまげを結っていた日本人が新しい「都会人」に変貌した、そんな時代の舞台となった建物が、まさにその場所に、新品として作られ、誰でも気軽に立ち寄って、お茶などができるのだ。埋め立て地のテーマパークとはわけが違う。本物の文化財でもできない相談だ。アカデミックな価値を云々する前に、材料や細部にこだわった迫力は誰にでも伝わるだろう。

だから特集には、もっと普通の人が、どうつきあえるのか、そんな視点もあったらよかったと思う。即物的にはマニアックな仕事以上でも以下でもないし、大計画の新手のアリバイづくりに見えなくもない。この「再現」を冒頭で述べた議論の深化につなげるためには、それが社会のなかでどうとらえられてゆくか見届ける必要があるだろう。10年後ぐらいの再特集を期待したい。

この議論に関わるべきなのか？

「三菱一號館」(以下「一號館」と略す)再現という奇妙な建設行為をめぐる、その評価、そのことにまつわる課題や可能性が、海外の事例とも比較しつつ取りあげられたことは、たしかに良い特集であった。この問題をめぐる考えるべき論点の多くに言及されていたように思う。かつて本物の「一號館」を取り壊し、今度は手のひらを返したかのようにそれを忠実に再現した企業の考えを聞いたことも幸いだった。しかし、歴史的建造物の価値は、設計者とその設計案にだけあるのではない。つくり、手を入れ、使い続ける、そこに多くの人が関わる、その時間の流れすべてが価値として付加されているのだ。建築家や業者は結局そこがわかっていない。だから松山巖氏も指摘し、他でも言われているように、隣にあった本物の八重洲ビルは「一號館」がらみの再開発で、わずかなアリバイを残して破壊された。特別な一点だけを過大に評価し、そこにだけ金や労力を投入する。現代の技術にできないことはないという科学技術過信の不遜な態度も見え隠れする。こうしたところにいまの日本社会の悪弊がよく現れている。結局は、歴史的建造物を守り、使い続ける気などないのだろう。私としては、こんな騒動に振り回されることなく、本物の歴史的建造物の一つひとつ守ってゆくことに精を出すしかない。わずかな費用で歴史的建造物を守ろうと苦勞している人は多いのに……(平城宮大極殿復原についても同じ思いを持つ)。再現「一號館」は模造品であり、現代建築のひとつとしてみておけばよい(だから価値がないというわけではない)。誰もがその存続を前提として生活していたところを、敵軍が意図的に破壊したドレスデンの聖母教会の再建とは本質的には違うはずだ。